



●ひと目で理解したい時こそ色

先般、道路の横断勾配で足首をグニっとやっしまい車椅子を利用しました。

お世話になった病院は地域中核病院だけあり、長い長い待ち時間。お手洗いは待合の椅子から見える位置にあり、多目的トイレの扉の取っ手には手作りパウチのプレートが黒紐でかかっています。

慣れない車椅子。出来るだけ移動はしたくない。そう思い、空いているかの確認を老眼&近視&乱視の目で必死に凝視。プレートが微妙に斜めになっていて、表裏が見えているにも拘らず文字の判別が付かず断念。

意を決し、扉の前に行くと、プレートには「使用可」、ひっくり返すと「使用中」と両方とも黒文字で書かれていました。

待ち時間でお腹も空いて疲れ果てていた私は「間違い探しか!」と思わず心の中でツッコミを入れると同時に、この文字色が青と赤だったら…そう強く思いました。

会計後、プレートがある事への感謝の言葉を添えて「文字色を変えるか色付き枠を」と記入し、勇気を出してご意見箱へ投函して帰りました。変更されている事を願いつつ再診に訪れる度、プレートをチラ見しています。
(幹事 水野智子)

●日本の伝統的な色名ー弁柄色

色名は、インド洋のベンガル湾に面し、カルカッタを中心としたインドのベンガル地方から渡ってきたことから、べんがら、弁柄という顔料の和名が生まれた。

辨柄色、紅柄色、紅殻色、榜葛刺色という表記も使われたベンガル地方の赤土から造られた赤鉄鉱を含む無機顔料である。

鎖国した江戸時代には国産化が進み、備中の高粱などに弁柄生産の遺構が見られる。

南蛮貿易で弁柄が渡来する前の奈良時代は、中国の代州で産出される代赭と呼ばれる天然産の赤土から取る褐色顔料が日本に入っていた。弁柄と、ほぼ同じ酸化鉄顔料である。他に、紫土とも呼ばれる紫みの濃い赤褐色の赭や、黄土と呼ばれる黄色酸化鉄顔料も使われていた。

弁柄は、京都の町屋や金沢の茶屋建築の塗装に残っている。その落ち着いた色合いが、町屋の伝統的な景観として、日本的な建築景観として保存されることは誇らしい。

酸化鉄顔料は、わかりやすく表現すると鉄錆の粉末であり、安全で安価で堅牢な無機顔料として赤色酸化鉄、黄色酸化鉄、黒色酸化鉄などが、工業生産されている。

(永田泰弘)

●大辞泉ひろい読み 102- さ・し

山色：さんしょく。山の色。

酸性染料：色素の分子中にスルホン酸基・カルボキシ基などの酸性の基を水溶性染料。羊毛・絹・ナイロンなどのたんぱく質系に繊維や皮革・紙・インク・食用色素などに広く使用。

シアン：猛毒で無色、特異臭のある気体。絵の具、印刷インキなどで、原色の青。緑がかった青色をなす。

地色：じいろ。布・紙などの地の色。女郎が土地の男を情夫にすること。また、その情夫。

紫雲：しうん。紫色の雲。念仏業者が臨終のとき、仏が乗って来迎する雲。吉兆とされる。

紫雲英：しうんえい。レンゲソウのこと。

紫衣：しえ。しい。紫色の袈裟および法衣の総称。古くは勅許によって着用した。

緇衣：しえ。しい。墨染の衣。

紫煙：しえん。紫色の煙。紫色のもや。特に、タバコの煙。

雌黄：しおう。石黄に同じ。タイ、ベトナムなどに産するオトギリソウ科植物からとった黄色の樹脂。黄色絵の具として日本画などで用いられる。草雌黄。藤黄。ガンボーシ。硫化ヒ素からなる。

*大辞泉：小学館発行国語辞典 (永田泰弘)